戦争 子どもも苦難

先の大戦末期、都市部の小学生を地方に避難させた学童疎開■の実施から、今年で70年になる。当時の児童は今80歳前後。5日の「こどもの日」によせて体験を聞き、子供の幸せについて語ってもらった。

学童疎開70年

ひもじさの記憶しかない

1944年9月、大阪市東成区の中本国民学校3年だった狩野豊子さん（78）（大阪府門真市）は、奈良県大和高田市の寺に集団疎開した。二つ下の妹も合流した。

空腹の記憶しかない。食事は茶わん一杯に満たない麦や芋。終戦後両親が会いに来た時は2人とも栄養失調だった。

45年10月、大阪に戻ったら、事情もわからぬまま伯父宅に連れ帰られた。両親が、食料の調達で香川の親戚を訪ねる途上、船が機雷に触れて沈んだと聞かされた。2歳の弟も一緒に亡くなった。

「戦争が終わったのに」。涙が止まらなかった。戦後もひもじく、「お母ちゃん戻って来て」と妹と泣いた。

結婚して息子2人を育てた。「遅刻してもいいからご飯食べて行き」と言い、息子の友達が来たら、「ご飯食べたんか」と尋ねた。就職後も朝弁当を作ったが、息子は「コンビニでも買えるからええよ」と言い、時代は変わったと思った。

我が子の食べ物を求め、闇切符を手に船に乗った両親に心から感謝している。

今、食べ物があふれても、子供たちが幸せに思えないのがつらい。心が痛むのは、いじめ自殺のニュースだ。

「どうしていじめるの。みんな、お母ちゃんやお父ちゃんの愛情があって生きている。それをもっと、子供に伝えないといけない」と思う。

（南部さやか）

営む昆布屋で近所の子とふれ合う狩野さん（左）。子供にはおなかいっぱい食べてほしい（大阪府門真市で）＝泉祥平撮影

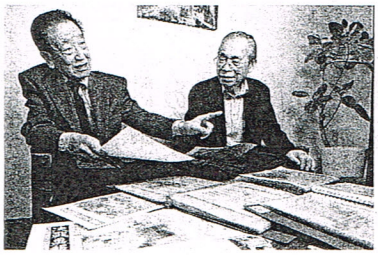
■学童疎開　1944～45年、空襲から逃れるため、都市部の児童を地方に避難させた政策。親族を頼る縁故疎開が原則だったが、44年6月の閣議決定で学校ごとの集団疎開も始まった。集団疎開は全国で約60万人。縁故疎開は大阪だけで約10万人とされる。

父の手作り冊子 毎月届く

大阪府吹田市の印刷業、福智久守也さん（79）は、父が疎開先に送ってきた手作り冊子「決戦画報」を大事に持っている。

小学4年の夏、姉2人と一緒に、大阪市西成区から父・仁剛さんの故郷、奈良県天川村に縁故疎開した。寂しく、「戦争はこの先どうなるのか」と考えていた。

思いに応えるように、画報は毎月届いた。終戦までに14冊（計385ページ）。特攻隊や南方の戦況、空襲を伝える新聞記事の見出しや写真を切り抜き、子供向きの解説を付けてあった。



父の「決戦画報」（手前）の話をする福智さん（左）（大阪市天王寺区で）＝永尾泰史撮影

「久守ちゃんは幼いのですから、寂しさや不自由があっても、安全な天川にいるのが何よりの幸せなのです」。そんな言葉も。

父は戦後5年ほどで亡くなり、画報を作った意図は聞かずじまい。「父なりに戦争のことを息子に伝え、考えさせようとしたのかもしれない」と想像する。

福智さんは、「戦争は勝っても負けてもむごい。子供たちは歴史を受け止め、社会問題に関心を持ち、善悪を判断できる大人に育ってほしい」と願う。

（桑田睦子）

受け入れた寺 愛情深く

疎開先で児童を受け入れた大人の多くはもう亡い。

福井県芦原町（現あわら市）の正賢寺で、大阪市城東区の榎並国民学校の子供から「お寺のおばちゃん」と慕われた白越竹さんも、終戦から14年後に56歳で亡くなった。竹さんの長男（故人）の妻、行子さん（84）によると、寺に来たのは女子ばかり約20人。竹さんは、元気を出させようと、面白い話をして笑わせ、寂しくて夜泣きする子は自分の布団に入れたという。地元住民からも「子供らに」と、芋や野菜が届いた。戦後、竹さんの死後も、児童と寺の交流は続いた。

行子さんは、「厳しい時代でしたが、子供だけでも助けたいと多くの大人が考えたことも事実でした」と話す。

（渡辺彩香）

10日にシンポジウム

学童疎開の狙いや戦時下の子供について考える「学童疎開シンポジウム」が10日午後1時半、大阪市西区の市立中央図書館で開かれる。戦争体験手記集「孫たちへの証言」を出版する新風書房（大阪市、06・6768・4600）が企画、当時の疎開児童らが語る。無料で、申し込みは不要。

学童疎開に詳しい赤塚康雄・元天理大教授（教育史）は「疎開経験者は高齢で、疎開の苦難を聞ける時間は限られている。あらためて不戦、平和の大切さを考えなければならない」と話す。